表2—6　竜神伝説

名称	所在地
十和田湖	秋田県
八郎潟	秋田県
潟沼	宮城県
沼沢沼（沼沢湖）	福島県
榛名湖・赤城小沼	群馬県
野尻湖・大沼	長野県
多鯰が池	鳥取県
余呉湖	滋賀県
大沼池・大浪池	鹿児島県

昔、潟の大沢集落から薬師峠を越えて、院内岳の向うに院内村（現田沢湖町岡崎）があり、その神成沢という所に三之丞という家があって、その家に辰子という一人娘がいた。

辰子の父は早くに亡くなって、辰子がものごころのついたころは、母と二人暮らしであった。辰子は美人でしかも明るく親切で、誰からも可愛がられて、健やかにすくすく育っていった。娘ざかりになるにしたがってますます綺麗になり、その美貌は近隣に鳴り響いた。

ある日、家の前の小川で髪を洗いながら、水面に映る自分の容姿の美しさに、自分自身で見とれるほどであった。

しかし辰子は、「私を美しいと、みんなが賞めてくれるのは嬉しいが、この若さはいつまで保てるだろうか。私もやがて結婚し、母となり、老婆となるだろう。年寄りになって、やがて死んでしまうのが運命だ。いつまでも若さを保ちたい。どうにかして若さを持ち続けることはできないだろうか」と思い悩むのであった。

若さを保つためには、神仏に祈る他はないと決心した。辰子屋敷跡側の山道を登ってゆくと、大蔵山観音堂がある。この大蔵山千手観音像は、昔坂上田村麻呂が東征にあたり、京都清水観音の分霊一寸八分の観音像を守り神としたが、大同二年戦乱を平定して凱旋するに当たり、大蔵山に安置したもので、その霊験はあらたかで、必ず願いごとをかなえてくれるという。

そこで辰子は、誰にも知られることなく、百日の願掛けをすることにした。秋の初め農作物の収穫が忙しく、日中の農作業で疲れた母がぐっすり眠った夜更けに、辰子はそっと家を抜け出してお参りをしようと暗い山道を一心に登った。

月が出ていれば、自分や樹々の影が恐しく、月の無い夜は、木の根につまずいたり、道を踏み外したり、夜の鳥の鳴き声に驚かされたりしたが、願いを成就させるには他に方法はないのだと自分自身に納得させ、ひたすら参詣するのであった。

毎夜神社に着くと、灯明を灯し「私は年をとって醜い老婆になりたくないのです。今のままの若さをいつ迄も保つことが出来るように、どうぞこの願いをかなえてください」と祈った。

やがて山々は美しい紅葉に包まれ、その色が褪せ、葉が落ちて地面を覆い、木枯らしが吹き、空から白い雪がちらついてきたころ、辰子のお百度参りの満願の日となった。

いつものように神社に参って、今日が満願の日であることを念じながら、祈りを捧げていたその時微かに、厳かな声が聞こえてきた。『辰子よ、そなたの切なる祈りを、聞き届けた。雪が消えて、春になったら、ここから北の方一里のところに清い泉が湧き出ている。そこに行って、泉の水を呑むが良い。さすれば、願いはかなうであろう』と。辰子は身がふるえるような感動に包まれた。そして我が家に帰りついて床についたのである。

長い長いみちのくの冬が過ぎて、春がやってきた。里には梅、桃、桜、辛夷などが一時に咲き出し、木立の中では鶯、山鳩、郭公鳥などが賑やかに鳴き交し、野には、わらび、うど、ほんな、しどけ、あいこ、ひでこなどの山菜が芽生えてくる。

天気の良い春の一日、辰子は近くの友人たちを誘って、満願の日にお告げのあった北の方に、山を越えて山菜採りに出かけた。空がよく晴れ渡り、麗らかな日射しが、辰子たちの気持を浮き浮きさせた。皆で民謡を唄ったり、世間話に打ち興じながら、ちょうど採りごろに伸びている山菜をたくさん採ったころ、昼時になったので、泉のほとりの小川の岸で昼食を取ることになり、友達は採り残した山菜をもう少し採ってくることになり、辰子は焚火をしながら待っていた。小川には魚が泳いでいて、手でいくらでも掴み取ることができた。辰子は魚を取って串にさし、焙りながら友達を待つことにした。ところが魚が焼けるにつれて香ばしい良い匂いがしてきて、がまんできなくなった辰子はまず一匹食べた。一匹食べると、もう一匹食べたくなり、一匹又一匹と、友達に食べさせようとした分も全部食べてしまったのである。

ところが辰子は、とたんに、咽喉が渇いて渇いてたまらなくなった。最初は、手で掬って呑んでいたが、渇きは、ますます募るばかり、しまいには、腹這いになって、口をつけて、がぶがぶと呑んだが、それでも渇きは、おさまらない。その時水面に映った辰子の顔は、人間の顔ではなく竜の顔になっていた。

その時、天地がまっくらになり、稲光りが闇をつんざき、雷鳴が轟き、盥の水をひっくりかえしたように雨が降ってきた。そして、どどーんという地響きと共に、今まで山菜の生い茂っていた野原が一挙に陥没し、そこに広い湖が現れ、竜の姿と化した辰子は、その中に沈んでいったのである（この物語は十和田湖の八郎太郎の話と全く同じである。）。

辰子の友達は幸いに助かったが、辰子の姿が見えないので、口々に声を限りに「タッコヤー、タッコー、タッコー」と叫んだが答えはなかった。友達は、山菜を背負うことなど忘れ、手に手を取り合って夕方にやっと我が家にたどり着き、辰子の母親に事の次第を告げたのであった。

辰子の母はそれを聞くと、燃えさしの焚木を松明代りに、辰子の消えたあたりまで探しに出かけた、院内岳の薬師峠を越えて行くと、今まで広い野原であった所が、広い広い潟になって、波が岸辺に打ち寄せているではないか。辰子の母は、その水面に向けて「タッコー、タッコー」と声を限りに叫んだのである。

その声に誘われたのか、暗い水面に、巨大な竜が姿を現わしたのである。辰子の母は、「探しているのは、そのような竜では無い、可愛い娘の辰子だ、本当の辰子を見たいのだ……」と叫んだのである。すると竜は波間に姿を消し、美しい娘姿の辰子が現われて、「お母さん、このような姿になって申しわけありません。実は私の姿が永久に変らないようにと、大蔵観音堂に百夜の願を掛けました。神様が、その願いを聞き届けられて、ここに大きな湖を作り、私をこの湖の主として、永遠の生命を授けてくれたのです。もはや人間の姿に戻ることは叶いませぬ。諦めてください。その代り、魚が必要な時は、いつでもお届けします」と告げるやいなや、再び辰子の姿は波間に消えたのである。

辰子の母は「情けなや、口惜しや、辰子の姿を元に戻して、我が家に返せ」と血を吐くような言葉を湖面に投げかけたが、答えるのは、ひたひたと打ち寄せる波の音だけであった。辰子の母が燃え残りの焚木を湖面に投げつけたら、不思議なことに、それが魚となって泳いでいったのである。

辰子の母は、涙も声もかれ果てて、とぼとぼと我が家に帰りついた。その後、辰子の母が魚が欲しいと思ったときには、水屋のキッツ（水槽）の中にたくさんの鱒が入っていたと言う。燃えさしの薪が魚になったと母は思って、この魚に「木の尻鱒」と名づけたという。またこの湖は「辰子潟」と呼ばれるようになった。

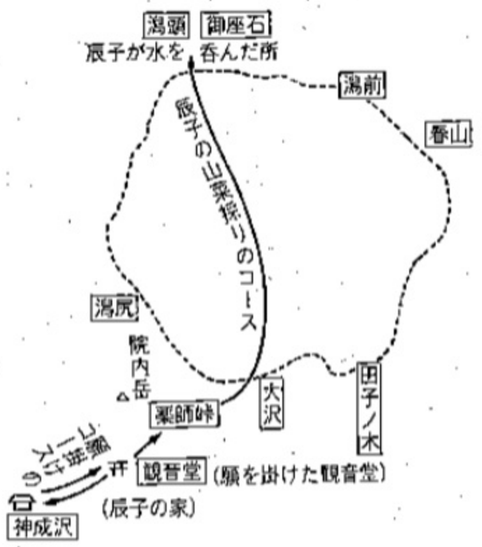


図2—10　辰子伝説のコース

（------線は、田沢湖の輪郭）

図2—10は、辰子伝説のコースである。